



# 里見八犬傳

へ13  
3416



曲亭翁編演

第九輯

六快

下中

之式

玉蘭齋貞秀畫

江戸書林文溪堂精刊

南總里見八犬傳第九輯卷之三十三簡端附録作者摠自評  
 稗官野史の言風を捕り影と逐ふ架空無根何を世の人の裨益ある其要の只  
 春の日も獨坐の睡魔を破るべく秋の夕も寂寥の樹影陶と豎土不足るの是を也  
 漢土不齊諧異苑の二書あり國朝小浦嶋子傳續浦嶋子傳あり便是和漢小  
 説の鼻祖戲墨の嚆矢といひ下。是より以降彼も我も其才小匿しつを。宇都保  
 源氏物語の艶あり且花菱を水滸西游記の奇くて且巧き其文絶妙句句錦  
 繡定不是稗史の大筆。和文の師表多るめら。只其足さる所を源語の事皆  
 漁姓小過て反く勸懲不詳るを。水滸の勸懲懲徴ありて是と悟る者る。うち  
 見の強人の義俠小過然も是亦惜むべし其大槓を知るも知ざるも又善讀の者も  
 讀めざるも南倍氏戲墨と事とせざる已か如記曲字者流の皆其懶卑小欲  
 了て糟を舐り垢脂を粘る和漢今昔幾人を其才ある骨を換胎と奪身之傑

八犬傳九輯卷三十三

文溪堂



出る。大筆殆世平也。其骨と撰む胎と奪を。國圖吞る。似て非る。者武を接ぐ。今に至りて衰へむ。蓋其筆の遠祖傳て。稗史物の本。小聖を所。以のあふとせや。抑古昔は文人才子の。稗史物の本。作り設る。必古人の姓名を借用して。胡意其事。異ふを。辟言源氏物語。光君竹採物語。赫赤姫。昔赫赤姫。美女人あり。詳か。水滸傳の宋江等。二十六人。及彼晁蓋。高俅等。西遊記の三藏法師。曲曲のまを。も。足る者。の意匠。めて作り設て。要の元。の未生の人も。亦。水滸傳の地。教七十二人。西遊記の孫悟空。豬悟能。沙悟淨。及諸魔鬼。君の如。毛筆る。小違。又憶ふ。稗史の胡意。其歲月を。具ふ。是將作者の用心。正史と同じ。か。示。然。本傳小名。と。出。北條長氏。の。思。彼長氏の伊豆。起りて。小田原。大木。実頼。を。伐。走。其城。據。り。明應二年の事。本傳。云。文明十五年。より。一元十二箇年後。然。本傳。當時の

事と。况安房の里見氏の山内扇谷の両管領と。兵を構。一。事。る。あ。む。か。事。猶。多。る。本傳の正史。合。ふ。外。の。作。り。設。け。條。中。年。號。を。考。へ。本意。不。違。や。似。れ。も。只。看。官。の。與。某。の。事。の。年。と。某。の。年。と。意。識。の。葉。不。做。あ。然。る。柱。膠。者。の。虚。實。の。間。遊。を。知。て。世。と。誣。ひ。俗。を。惑。は。す。憎。論。を。腐。爛。不。庶。か。べ。毛。鶴。山。が。琵琶記の評。其。傳。奇。を。蔡。邕。成。評。あ。て。の。蔡。邕。の。後。漢。の。蔡。邕。不。て。後。漢。の。蔡。邕。あ。ら。う。是。別。人。と。さ。す。べ。の。婦。幼。の。疑。ひ。を。解。く。不。足。る。老。實。者。の。言。の。似。ら。る。只。琵琶記の蔡。邕。の。ま。ら。西。廂。記。の。鶯。鶯。の。類。傳。奇。も。多。く。あ。り。て。古。人。の。姓。名。を。借。用。者。此。回。の。能。樂。降。り。て。歌。傳。伎。淨。瑠。璃。本。の。如。看。官。誰。う。実。事。と。せ。や。明。の。謝。肇。淞。の。今。の。人。稗。史。小。説。を。見。て。其。年。紀。事。実。の。正。史。不。合。さ。る。あ。れ。云。云。の。者。あ。ら。か。の。如。く。ら。ん。正。史。を。讀。み。不。如。其。事。の。実。不。過。だ。る。岡。巷。の。小。兒。を。悦。ま。る。と。士。君。子。は。為。道。不。



足らざるは宣定不足危言なる近屬雄飛録の作者其書の中本傳の  
 実録と年紀合する外ありて其下誹りし予の鳥辭多思ひの齒不撰る足  
 されが當時解嘲不及なり今思ひ出れば筆の次聊然然れが未解如く本傳  
 る里見父子並八代氏て不善士等の昔の里見氏中昔の里見氏を其昔の  
 八代氏也昔の八代氏も且本傳の歲月も則昔の歲月也亦是昔の歲月  
 るをいでもあるは架空の言畢竟遊戯之味を毫も世の裨益を。這裨益を  
 此技は幾春秋の意匠と俱く人人工費して老に至ると知るも其本傳都て  
 百七十回杖あるる如筆を只日暮春のほぐと幾遍物をあも思ひ難く脚曳の  
 山鶏の尾のある尾のある貌る長物語の鳥辭か。あ鳥辭人の鳥辭のまま  
 あれども欲するより善と勸り悪と懲らし世間の教を承る者女子童蒙家箱温  
 連の迷津の一夜中もそれかその所為を戲筆末筆と把り初は吾少壯昔上

て構て久ある隨六史九經女教女訓の貴をいもも觸れ聖教賢誨の  
 悉くを夢も知らぬ婦女の予が綴る物の本との好て讀正年来ふる隨小稍  
 仁義八行の人身在る道理も不義隱匿の身を亡す所以もあつらふ辨知  
 近隣人の女子輩の教もあつらふ其教を人修す云云とこれとあり  
 切りのまふと本意稱名ありて世の諺不云鱗の頭も深信のよれが身べり然  
 是等の人の為猶諄反く解くはる大凡釋史物の本古人の姓名を借用ま  
 るの上もいふと昔の孝子順孫忠臣貞女を誣て悪人を作り易く其  
 善悪を轉倒共縦新奇とあへも勸懲不甚害あり本傳の全碗八  
 郎孝吉の故君の為怨を復して且三君の仕む自殺あり義烈の士又山林房八  
 身を殺して仁を為る義侠の良民俱く未生の人れも是等と穢虐竊盜大  
 悪人を作り易く予が甘せざる所釋史傳奇の果敢る見るは所々勸懲



在。勸懲正しむれば。誨淫道。然の外中。或善人不幸。而惡人の惨毒。死  
 辱を曝さるるも。作者宜く憚る。勸懲係れが。因て意不。和漢今昔。字  
 なる奇才子。未君子の大道。の聞さ才子。其才。是。一。る。れ。も。も。又。思。全  
 遂。君。子。の。大。道。を。知。り。て。勸。懲。正。し。ら。ん。最。難。し。も。か。ら。る。べ。し。の。故。予。常。不  
 の。唐。山。を。大。筆。を。揮。史。の。作。者。皆。能。學。び。て。君。子。の。大。道。を。知。ら。る。る。余。亦。其  
 稗。史。中。の。淫。奔。猥。褻。の。段。間。を。見。て。悟。ら。る。者。ハ。作。者。時。好。小。媚。て。這。醜。情。を  
 寫。し。た。ら。と。の。思。ふ。豈。然。ら。ん。あ。ら。ん。也。其。淫。奔。者。の。殘。忍。兇。惡。の。男。女。の。善  
 人。の。事。を。譬。言。水。滸。修。武。大。郎。の。妻。潘。金。蓮。が。西。門。啓。と。奸。通。の。醜。態。を。寫  
 去。又。揚。雄。の。妻。潘。巧。雲。が。裴。如。海。と。奸。通。の。事。あ。ら。如。し。這。潘。金。蓮。潘。巧。雲。西。門  
 啓。裴。如。海。等。の。毒。惡。慘。刺。罪。死。を。容。さ。る。猿。鶴。虎。狼。の。大。惡。人。之。這。蕪。夫。淫。婦。等  
 が。不。義。の。淫。慾。不。軌。の。身。と。看。官。羨。ま。く。思。ふ。便。是。勸。懲。係。る。所。後。の。淫。淫。

戒る。作者の徳微く精尖。是より下。冷山平燕を師とて。才子佳人の奇遇。作  
 了。設る者。近日舶来の小刻。特小。多。好。速。修。柳。鶯。轉。の。如。は。樓。盡。さ。る。も。わ  
 志。孰。も。相。似。て。時。好。小。媚。さ。る。も。わ。然。も。只。其。真。情。を。寫。し。て。淫。奔。猥。褻。を。筆。と  
 要。せ。る。則。是。本。傳。を。信。乃。と。濱。路。の。情。態。を。見。て。思。ふ。其。情。態。亦。好。人。と。才。人。の  
 差。別。あ。ら。ん。又。本。傳。を。麓。山。綠。蓮。と。船。虫。と。竹。林。巽。と。於。免。子。の。如。し。皆。是。水。滸。の  
 潘。金。蓮。西。門。啓。等。も。作。り。設。て。邪。淫。の。戒。を。示。し。心。操。亦。同。況。や。美。少。年。録。を  
 陶。朱。之。助。が。其。淫。の。甚。し。き。予。が。筆。尖。似。け。る。と。看。官。思。ふ。予。が。本。意。の  
 是。那。朱。之。助。の。後。の。陶。晴。賢。と。成。登。る。元。祇。逆。の。大。惡。人。他。が。少。年。を。り。時。淫  
 奔。る。も。遂。次。て。誰。の。晴。賢。と。え。ん。と。願。ふ。是。亦。勸。懲。係。る。所。の。一。つ。の。思。ふ。只  
 善。中。の。善。惡。も。あ。ら。ぬ。貴。公。の。公子。閨。門。の。麗。人。及。市。井。の。男。女。の。胸。襟。を。鏡。の。相。援  
 け。野。合。の。淫。樂。の。痴。情。を。宗。と。寫。さ。る。者。誨。淫。道。を。懲。ら。る。と。の。事。を。予。が



せざる所へ昔孔子の詩を削るや猶淫性の詞を遺して其又も盡さざれば後小戒を  
 無るへ又心誅の文法を以て春秋を作る及びて乱臣賊子の怕れと云果敢  
 釋史物の本へとも学問の餘力とせる真の作者の心操を見てもありけり  
 本傳の定正頭定成氏の如くに比自暴自棄暗愚の君を酷く敗して作り  
 蔽り兼て京都將軍の命令とて持氏の幼息春王安王を生拘り害て且故  
 君の職を横領する不義逆惡の心あり定正頭定其見孫として大職を兼續  
 義をえ久らむ刺扇谷定正最後の仇の証言と信容れて持次入道道權  
 誅あり兵權の衰へて子孫凋落せざることをいふるも本傳の敗れて  
 愚將と入成氏の如くに冤家の為に立られ時教を知む切小害悪心と誅して録

倉と追ひこれ許我の程りて其城をも頭定の攻破られて千世永小寓居をこれ  
 仁義を以て家と因まこと知む先父持氏の賊逆の逢る乃祖尊氏の下剋上の餘  
 殃を悟らざりて不賢とて敗る意衰の清の逸田史が女仙外史の所謂  
 春秋心誅の筆の効ふとのいふ鳥許の多かるべけれどもこの餘も本傳の原  
 人を知るべし又本傳の經文聖教と雜識ありて人或は誣咎めて物の本  
 かに經文聖教の慢侮を學飲僻事とて嗤の賢もあるふそらそら志と異  
 高の小説るれも其仁義を説き善惡を辨するに至りては虚実の二あるも  
 書五經と一言一句も学必する婦幼も本傳を愛讀序の序筆て其經文聖語の尊  
 知るありて且感且悟りて学びの道志志入人もあれと思ひぬ是老  
 言儒經を及びて聖語を慢侮せ用捨の看官の隨意なるべし  
 時 己亥の秋采月著作堂の南窓小静坐して本傳の作者みづる評





南總里見八犬傳第九輯下帙之下乙號編中套目錄

卷之五  
第百五十四回

百中賣卜侶兩將  
風外風術招撰二

第百五十五回

豐俊得時請恩赦  
妙真愁想入軍役

卷之五  
第百五十六回

貞行託與留禪子  
毛野明察免死囚

四上  
第百五十七回

上總民孝義稟再恩  
安房侯仁心定軍令

三下  
第百五十八回

瀧田三使獻生拘

四下  
第百五十八回

扇谷間諜導假使

卷之五  
第百五十九回

助友忠誠代父志  
信隆機變借旗兵

五上  
第百六十回

衛士相桃兩枝花  
名將許容內應質

三下  
第百六十一回

重時逢異同兩生  
義任凜人先二勇

五下

自是之下至第百七十回將結局云其後板者  
五冊近日又復續出焉則全壁大團圓

南總里見八犬傳第九輯下帙之下乙號編中套目錄終





あつみかたをたもつてめくぬる小田子  
わさの海馬のひとりとさうきねる齋

武田左京亮信隆  
たけのこしんりゅう

磯崎増松  
ありおのちり

八天傳し昇巻

七

文後堂蔵



賢童五里  
巷貝宮莫佳  
人魚

安西就八景重  
あまのりゅう

人魚

六天傳し昇巻

文後堂蔵





八代傳九郎卷

公上

八代傳九郎



八代傳九郎

八代傳九郎





貌姑姫  
大石

つらあいの  
池の委何有  
み影岡を  
貌姑射の山と  
箱をもて持  
著作堂

天津九四郎員明  
神鏡の影

ホリ百次郎

八天傳九郎卷三十三

八甲

文楽堂



勁風盪艦  
甘雨洗干  
祭

大石源左衛門尉  
憲儀

仁田山晋六武佐  
御膳

八天傳九郎卷三十三

文楽堂



自評餘論

或云近曾文人の好事る。江戸を東都と書て是ハ固字を施しく。アツ  
マノミヤコと讀せざるあり。遮莫みやこハ皇居の地を云べし。武藏ハ古より皇  
居の地ハあるべし。稱するハ僻事。云國學者流ハ辨論あり。そ  
翁も知れる者べし。然るに翁の作する物の本毎ハ東都曲亭云と録し。り。  
るハ僻事。あるべし。と詰るハ予答ていへ。然るに皇居の地をみよと稱  
するハみやこ。所ハ多し。是ハ都字ハ借用するハ漢土。天子の居  
所を都といへ。かれハ都の字義ハ猶ヨリ。正字通ハ天子所居  
曰都。又十邑曰都。又邑都名相通。周禮距國五百里爲  
都。又總也。聚也。皆也。歎美辭也。凡言俱者曰都。又麗也。  
閔雅也。と注し。り。學者の知る所ハ具ハせず。只其要ハ摘む。是ハ

大傳九章卷三十一

大傳九章卷三十一

由てあれを規れ。和漢其差ある。都の和訓みよる。

由てあれを規れ。和漢其差ある。都の和訓みよる。

たり。去てハ則都會の義ハ然ハ東都と書てアツマヤコと讀するハ僻事

いれけ。已ハ東都を字音也。則是をトウトと讀て東の都會日といハ用い

ふ。南都といハ東都を字音の隨ハ讀む。都をみよハ義ハ思ハる者

らハ然。都會の都。主なる牽強傳會ハハ理論。あらハ狹知。其

頭の論義ハ物ハ一。抑吾作れる物の本ハ皆是。根の小説也。百正

くも。技能ハ作者の本質也。録するハ胡意。江戸といハ。則東都と稱

たり。故ハ名號も曲亭。主人と自稱。女同頼鳥。凉風といハ。云二の雅號

り。著者。予ハ別號。其ハ中ハ馬琴。曲亭の二稱。始より

戲墨。小の。用ハ賤號。名號。小の。用心。あり。地名。亦ハ心

大傳九章卷三十一

八下

大傳九章卷三十一



んやある人るとて猜せざりけ。予が編集を同放言の餘も真面目の隨筆  
必姓名を見りて則江門と録し。敢請世間億兆の君子物よりて予が  
用意の差別あると思ふべ。吾少くも時行心く只の一枝小西馬されより名  
利の奴ある因名不可を今悔て及び既中て痛く老ら。大部かくの如た物の  
本と二の作りかゝるべく。かむののいふも今或問微り其後の人吾用意を  
悟る必論するもあんと思ふるの自評と俱小又の編と附記して。後  
譏嘲を解まをも多辯の徳の害とといふ文中子の為恥べし。

○前板 第九輯卷の二十九 百四十六 五冊中の亦校訂の送漏あり。と思へ。今  
の五冊を稿ト果るまで前板の彫盡を才の二冊成を告を倉卒小  
披閱るゆゆの何ぞ今再訂由あるを又後板卷の三十六第百六十  
二回の簡端に録まべし。

自評餘論終

南總里見八犬傳第九輯卷之三十三

東都 曲亭主人編次

第百五十四 風外風術巽二を招く

先説五十子の城内の既して十二月末二三日ありし時候より約束の諸侯  
來會して士卒第二郭を克満ら。中管領兵部大輔山内頭定家  
臣齋藤兵衛佐高実の山内の館を守らせ。嫡男上杉五郎憲房と共に  
軍兵一萬餘騎を従へ。十二月朔日鎌倉を打立て三日五十子來會を相  
從ふ兩大丈白石城介重勝小幡木頭東良隊兵各千五百餘騎共一  
萬二千餘騎先六御河の上不到と定正と會盟あり其事畢て五十子の城へ迎へ  
隊の軍兵も入るは堪む。尚大森陣を。這他足利左兵衛尉成氏二千餘騎



つんのあすけらるるせんよき。ろがそとあえりゆるせんよき。あひらのちりつ  
千葉新介自胤一十餘騎長尾判官景春二千餘騎能大刀自の代軍稻戸津  
衛由充十五百餘騎摠大将扇谷修理大夫定正七十餘騎定正の庶長子式  
部少輔朝寧一十餘騎嫡子五郎朝良十五百餘騎大石見守憲重千二  
百餘騎其子源左衛門尉憲儀五百餘騎又近國近郡の野武士們招るる集  
來り頭定正の隊不附く者殊不衆ヌイカレれ都て五六萬騎及びて偽  
て十萬餘騎と唱ふる内長尾景春の既不出陣の報ありとのも胡意中途不  
淹留といふ五十子の城に至らざり又許我の足利成氏の初大石憲儀摠大将  
仰んとい言の憑り且横城在村不薦ゆれて任る五十子の城の來會あり定正  
頭定の敢成氏を敬む動もまれ勢い無一くを礼る舉動勘るなり成氏あを  
憤りてかり去ると思ふも又世の人の嘲諷の有較糸上影護けれ獨安る收會を  
押へ黙然として在る日程の十二月二日幸す定正頭定諸將を集合て水陸の

軍評定ありけり登時定正謀りていへ我意今柴浦より安房上總へ一草  
多く渡るべし然らば順風宜し日多し大小の戦艦あちら乗て一時安房へ推渡ら  
るる唾して義成を虜あえり易るべしと敵の士卒と分入與陸の下總多圍  
府臺式の中川行徳津一二の大將を遣して下總を界上總不到ら我陸と水  
大兵相合る敵の前後を防ぐ由多し兎を脱れ鋒を倒して皆降らんと願ふ  
議什麼と勢い猛くも命令如く説示も頭定は頭を掉く其計好とい  
ども我大兵江を渡る敵も亦船を浮めて逆ら防戦ふ且敵の海邊を家と  
まされ水戦不熟る者之然りと況や今去冬の真中寒威壯多折るる士  
卒の脚龜りて船の上の様なり必自由多ると思ふ其甚麼と難まれ大石  
憲重找と出て両侯の御宏論孰も是の理あり然るも江を渡る敵と一時  
七一かゝるを憚りぬいども順風烈に折と待る風上より火を放ちて敵を焼く



昔唐山三國の時兵の周瑜が曹操の大軍を克けるも只風と火の勢  
 助ふ据れり。その勢を思へられざるを頭定らば然らば火攻のなり。我亦始  
 思ひざるもあつたも二八月の時候なる風烈は日の暮るる前月ありて今日までも  
 浦風暴発は日稀に倘幸は二四日の内は烈は順風ありとも我火を放つ時及び  
 其風猛可吹替ふ反て躬方の船を焼くべし。舟亦危し殆どと論じて果つて  
 申され定正一霎時沈吟して大輔殿の議論は遠慮は過ら躬方武  
 運は稱い風も吹く替ふは明日は柴浦へ立出で那地へ渡る遠近を地方  
 民も尋問の便宜とありとあり今や狐疑もするを諸軍一座の諸將  
 成氏自胤朝寧朝良憲房と首を白石重勝小幡東良大石憲重並葉憲  
 儀稲戸津衛由充も大家の議に従ひけり。然らば其次の日定正頭定は白石憲  
 儀白石重勝以下士卒と僅か百名許を従へて俱に城を出馬を找々柴濱高

暇の浦邊より眺望する則浦人を召よせ。這里より安房上總へ渡るは水路の  
 遠近を問せし浦人答て然らば上總の木更津まで水路十六里。野  
 へおち便路ありは扁舟を渡るも一夜にして到る。他商甘前面高く時立  
 たる安房の鋸山より那山の邊多海濱まで八九里のやいり。それをも横走る船  
 持の危に著る。渡る者いへは洲崎は猶右方なり。それより斜に十餘里許あり  
 る。然らば他領を漁網も那浦近く。這浦より船を寄せしは。詳知を  
 けり。登時一個の賣下氏あり。編笠深く戴たる。身は涅染の太絹の故。小袖を  
 被て朱鞆の一刀と腰を跨り磯馴松の下る。平岳の尻を掛て小机の上。易経と  
 卦木と筒を立てる筵竹あり。又紙を捻り裏紙三四あり。相距ると遠く。今  
 浦人の家々の具も少く。忽地高く峻たて。當卦本卦吉凶悔吝方位宅相  
 勝敗利害我占妙々百筵百中問せぬ。と喚る聲あり。定正敬驚に見り。頭





大正十一年  
 九月  
 廿五日  
 刊

大正十一年  
 九月  
 廿五日  
 刊







たの幸ひやてよく當六賞禄の必乞ふ儘せん然りや。欲き順風ありとも其  
 風烈しうされ謀る所ある見且其風の何時候吹くや吹く必列隊や向へ百中然  
 い辰の數の五之己の數の即四より四五十日待されいひるをいひる。とて頭定飲  
 定正をそそりて和殿のいふ思ひゆる。數萬の軍兵既集合ありと並て空懸て徒  
 日と過ま戰飯場て叛く者あり然るに勞して功を不便せと嘆け定正も亦  
 樂も俱百中うち向いてや百中。汝の易ふ妙をいひる風を自由お召ぶ術のなや  
 あふ千金の數一とを幫助するねと慇懃不請れて百中答るや。御説餘議る  
 くのいも在下の天地を動さまで術者ありを師を以て風外道人と其法術を量  
 あり鬼神を役し風を召び雲を起し雨を降さ其妙其術古の役小角伯仲  
 然りけれも道人の塵交り術を賣るを年来遊姑峯山居くひ偶這  
 頭を隠遊びて今山谷山は在るの師に就て順風を乞ひるをいひて御本意の

如くふるべきの設る儘一のえとる。在下御導と仕んと云言皆便宜なれば定正頭  
 定飲い不堪せ。多く徑お其師を訪ん却何を齎せんと問を百中答るや否師の  
 寡欲るもの。紙一枚でも報いを受て請る者あり。則沐浴存戒して。若し對  
 面を饒され。か遮莫猛可の御登山され御伴當代垢離と當りて那里へいそ  
 があふをを兩將終び容て欣然とて敢遲擬せ。隨即伴の近習を口で若  
 ちの兩三名今咱もが名代か海に浸り潮垢離執りて俱深信祈請と迹より  
 谷山來ると分付れ百中の退いて易經筮竹の餘の東西まで皆袂に裏て懐お  
 多小机の脚を折枉て引提て來る程に雜兵伏りて推しおる。愆而定正頭定ち  
 各馬をもち來りて白石重勝大石憲儀以下の伴の士卒と皆從へて赤品百中を  
 先にお立ち早く谷山來りければ百中則相敬言めて定正頭定ち下馬をせ士卒は  
 く登るを饒さ。又只重勝と憲儀と兩家の近習五六名を從せて俱お山を登る



程小常葉樹の多不敏なり柱る。這山の平腹は上古の穴居の迹候とかりに一箇の  
 横穴ありけり。この洞内は杭筵才一枚布て端然と結跏趺坐する。一個の衰法  
 師居り形貌は瘦て千歳の松の如く。脚の細も蟠る竹根に似たり。鬚は黒く又  
 白く毛既二毛と見ると公免頭髪も亦伸る。身は故りる單の淨衣と被る。海  
 松の像く破れ撥垂る。黒漆の麻の裳法衣と纏ひ。眼と閉て合掌する。开か身  
 邊は臍體の灰を裝て。香爐代に焼る。林香の煙靡る身を消し起り。雷下  
 赤品山中に且定正顯定主徒を樹下立在せ。單洞の内は杖を向ひて跪にけ  
 報る。師父我百中。自今還りの心を風外うちて。眼と睜に領にて百中飲爾  
 る。今日なるか。るを早る。やと問へ百中。然し御高駿を憶る。く  
 扇谷山内の両管領の為。一筆を布けける。折言師父の上及びて。憑る美の只得  
 俱して参り。其故の箇様々々。恁々おひと。今番定正顯定和睦合體して。里見

亡きまぐ欲まる。自家の大軍水路を渡して。敵を火攻し。做まらざる。其折自由  
 ゆる。然し則列に順風。因り師父の風と来ると。其望の趣を告げ。風外頭と掉  
 了。とち又要る。紹介に我術風と自由ある。せども人を害して土地を奪ふ。其惡  
 強人。異なる。我を殺す。我を殺す。去る。去る。と叱る。百中推返して。仰理の  
 心。征伐。闘戦。武の道。況他。逆。我の順。則我順をり。那逆を討て。八  
 州。是より平治して。國民塗炭と免れん。枉て需を容れぬ。と口説け。定正顯定も  
 共侶。洞門。杖を寄り。揖して。道人。咱等。是。關東の。両管領。み。ら。る。小。顧。問。へ。る。  
 心の誠を照査ある。願ひを慥へぬ。か。と。と。請。求。れ。風。外。道。人。嘆。息。を。氣。に。し。て。  
 ち。ら。ん。は。是。非。及。び。我。の。風。を。起。し。給。せ。ん。故。き。方。の。西。吹。東。吹。本。月。幾。日。小。江。を  
 渡。ま。と。問。て。定。正。答。る。や。風。の。乾。を。順。風。と。も。列。に。願。へ。も。酷。く。猛。烈。る。ら。ば。  
 自家の船を覆え。然し疾く。程と吹て。變る。と。始終。乾。を。大。利。と



其の(一) 顕定も亦(一) 諸方の軍兵催促(一) 従(一) ざる者(一) ある(一) 者(一) あり(一) ければ(一) 咸(一) 五十(一) 子(一) 充(一) 満(一) ち(一) たり(一) 出陣(一) せ(一) ざ(一) る(一) 欲(一) せ(一) 四(一) 五(一) 日(一) 内(一) 小(一) 吉(一) 日(一) あり(一) とい(一) 問(一) へ(一) 風(一) 外(一) 指(一) と(一) 折(一) て(一) 今日(一) 十二(一) 日(一) 四(一) 日(一) へ(一) 今(一) あり(一) して(一) 四(一) 日(一) の(一) 後(一) 八(一) 日(一) の(一) 黄(一) 道(一) 大(一) 吉(一) 日(一) 乾(一) よ(一) う(一) して(一) 其(一) 共(一) 入(一) り(一) 事(一) を(一) 計(一) り(一) 大(一) 利(一) あり(一) 本(一) 月(一) 八(一) 日(一) の(一) 辰(一) 牌(一) あり(一) 端(一) 小(一) 乾(一) 風(一) を(一) 起(一) して(一) 當(一) 晚(一) 爰(一) 中(一) 小(一) 至(一) り(一) 休(一) む(一) べ(一) と(一) 云(一) へ(一) 其(一) の(一) 猶(一) 疑(一) あり(一) 心(一) 許(一) ず(一) 思(一) れ(一) 先(一) 也(一) 試(一) 小(一) 我(一) 本(一) 事(一) と(一) 示(一) さ(一) せ(一) 這(一) 方(一) へ(一) 來(一) ませ(一) と(一) 身(一) を(一) 起(一) ち(一) 洞(一) 門(一) へ(一) 立(一) 出(一) ち(一) 山(一) の(一) 頂(一) へ(一) 攀(一) 登(一) れ(一) 定(一) 正(一) 顯(一) 定(一) 以(一) 下(一) の(一) 毎(一) 重(一) 勝(一) 憲(一) 儀(一) 兩(一) 家(一) の(一) 伴(一) 當(一) 百(一) 中(一) と(一) 共(一) 侶(一) 小(一) 相(一) 從(一) ち(一) 登(一) り(一) 登(一) 時(一) 風(一) 外(一) 道(一) 人(一) の(一) 立(一) ち(一) 隨(一) 小(一) 乾(一) 朝(一) ひ(一) 懐(一) 小(一) 細(一) 小(一) 錦(一) の(一) 惠(一) 表(一) 物(一) を(一) 合(一) 出(一) ち(一) 一(一) 霎(一) 時(一) 額(一) 推(一) 當(一) て(一) 眼(一) を(一) 閉(一) 呪(一) 文(一) を(一) 唱(一) へ(一) 軀(一) 小(一) 伴(一) の(一) 惠(一) 表(一) 物(一) を(一) 會(一) 直(一) ち(一) 招(一) 小(一) 怪(一) む(一) 乾(一) の(一) 方(一) へ(一) 疾(一) 風(一) 忽(一) 焉(一) と(一) 音(一) 來(一) ち(一) 砂(一) 礫(一) を(一) 賜(一) け(一) 樹(一) を(一) 鳴(一) せ(一) 定(一) 正(一) 顯(一) 定(一) 伴(一) 當(一) 們(一) まで(一) 吹(一) 墜(一) され(一) と(一) 石(一) 小(一) 推(一) り(一) 或(一) の(一) 葛(一) 藤(一) 枯(一) 芒(一) 花(一) 小(一) 縹(一) 附(一) て(一) 一(一) 霎(一) 時(一) 七(一) 在(一) け(一) 久(一) 一(一) 堪(一) 死(一) 勢(一) ひ(一) る(一) 定(一) 正(一)

顯(一) 定(一) 聲(一) 共(一) 侶(一) 小(一) 道(一) 人(一) 本(一) 事(一) の(一) 知(一) り(一) 願(一) 小(一) 風(一) を(一) 散(一) め(一) 納(一) め(一) と(一) 叫(一) ぶ(一) 風(一) 外(一) 然(一) 七(一) と(一) 合(一) 笑(一) ち(一) 更(一) 又(一) 呪(一) 文(一) を(一) 唱(一) へ(一) 惠(一) 表(一) 物(一) 懷(一) 來(一) れ(一) 姑(一) 且(一) 風(一) 歌(一) 塵(一) 動(一) ち(一) 更(一) 一(一) 憲(一) 儀(一) 重(一) 勝(一) 以(一) 下(一) の(一) 伴(一) 當(一) まで(一) 駭(一) 嘆(一) して(一) 天(一) ち(一) 瞻(一) 定(一) 正(一) 顯(一) 定(一) 共(一) 侶(一) 小(一) 貌(一) 更(一) め(一) 塵(一) ち(一) 拂(一) ち(一) 謹(一) 風(一) 外(一) 朝(一) ち(一) 扶(一) び(一) 塵(一) を(一) 陳(一) ち(一) 師(一) 小(一) 寔(一) 小(一) 神(一) 仙(一) 既(一) 小(一) 奇(一) 風(一) の(一) 幫助(一) あり(一) 敵(一) 火(一) 攻(一) の(一) 計(一) 成(一) り(一) 義(一) 成(一) 父(一) 子(一) と(一) 虜(一) 小(一) 憎(一) 一(一) 思(一) 惡(一) 八(一) 犬(一) 士(一) 昏(一) 敵(一) 軍(一) 門(一) へ(一) 鼻(一) 入(一) ち(一) 翌(一) 四(一) 日(一) 外(一) を(一) 出(一) ち(一) 凱(一) 旋(一) の(一) 折(一) 又(一) 小(一) 來(一) ち(一) 拜(一) 見(一) 一(一) 法(一) 恩(一) の(一) 報(一) ひ(一) ち(一) 塵(一) を(一) 風(一) 外(一) 吹(一) ち(一) 否(一) 一(一) 我(一) 人(一) の(一) 為(一) 小(一) 偶(一) 小(一) 術(一) を(一) 施(一) せ(一) 報(一) ひ(一) 思(一) 者(一) 小(一) あり(一) 然(一) 那(一) 風(一) を(一) 起(一) ち(一) 次(一) の(一) 日(一) あり(一) 去(一) ち(一) 舊(一) 山(一) 還(一) へ(一) 兩(一) 公(一) 掛(一) 念(一) る(一) 去(一) ち(一) 又(一) 對(一) 面(一) 折(一) ち(一) 一(一) 只(一) 我(一) 弟(一) 子(一) 百(一) 中(一) 權(一) 且(一) 兩(一) 公(一) 小(一) 從(一) せ(一) 他(一) 親(一) 赤(一) 品(一) 其(一) 甲(一) 伊(一) 豆(一) 堀(一) 越(一) の(一) 御(一) 所(一) 政(一) 知(一) の(一) 舊(一) 臣(一) あり(一) 先(一) 君(一) 卒(一) 去(一) の(一) 折(一) 伊(一) 勢(一) 新(一) 九(一) 郎(一) 長(一) 氏(一) 籠(一) れ(一) 城(一) 地(一) 失(一) ち(一) 一(一) 那(一) 身(一) 則(一) 退(一) 隱(一) 一(一) 相(一) 模(一) の(一) 武(一) 澤(一) 居(一) ち(一) 夫(一) 婦(一)



ともうたつた。すてこれこゑん。その子百中孝順。且奇才あり我其孤を憐て  
 共の打續て既小是古人のぬ其子百中孝順。且奇才あり我其孤を憐て  
 年来弟子未だ易を墮せし既のく奥義をゆる。倘疑はるあふ必他小問  
 父との晤譚の間定正顯定の心とも共侶の渾の方を眺れ。這前濱る科  
 草ら。上總のゆる安房までも斜下りて見えける。當下顯定告てい。師  
 父の教誨幸ひ。肝胆小銘して忘るへ。就て又教を受けて感ひを解ま。云を  
 美あり。御京の高嶺。地方の浦人を力とせ。安房へ渡る。水路の便宜を云を  
 尋。其答詳る。船中安房へ赴く。何の浦か近きや。誨え。と請問。ハ  
 風外も亦海を眺め。現其説も要緊る。安房の洲崎を第一の港口とま。  
 稲村の城へ近ければ。諸國の海船の都て洲崎へ入る。約水路の洲  
 崎へ近ら。相摸の三浦より。繞る六里。不過。相望。其浦多。昔屋も松も數  
 あり。然。兩公の戦艦。八日の曉。早く。高嶺の浦より。浦出。三浦の方へ推

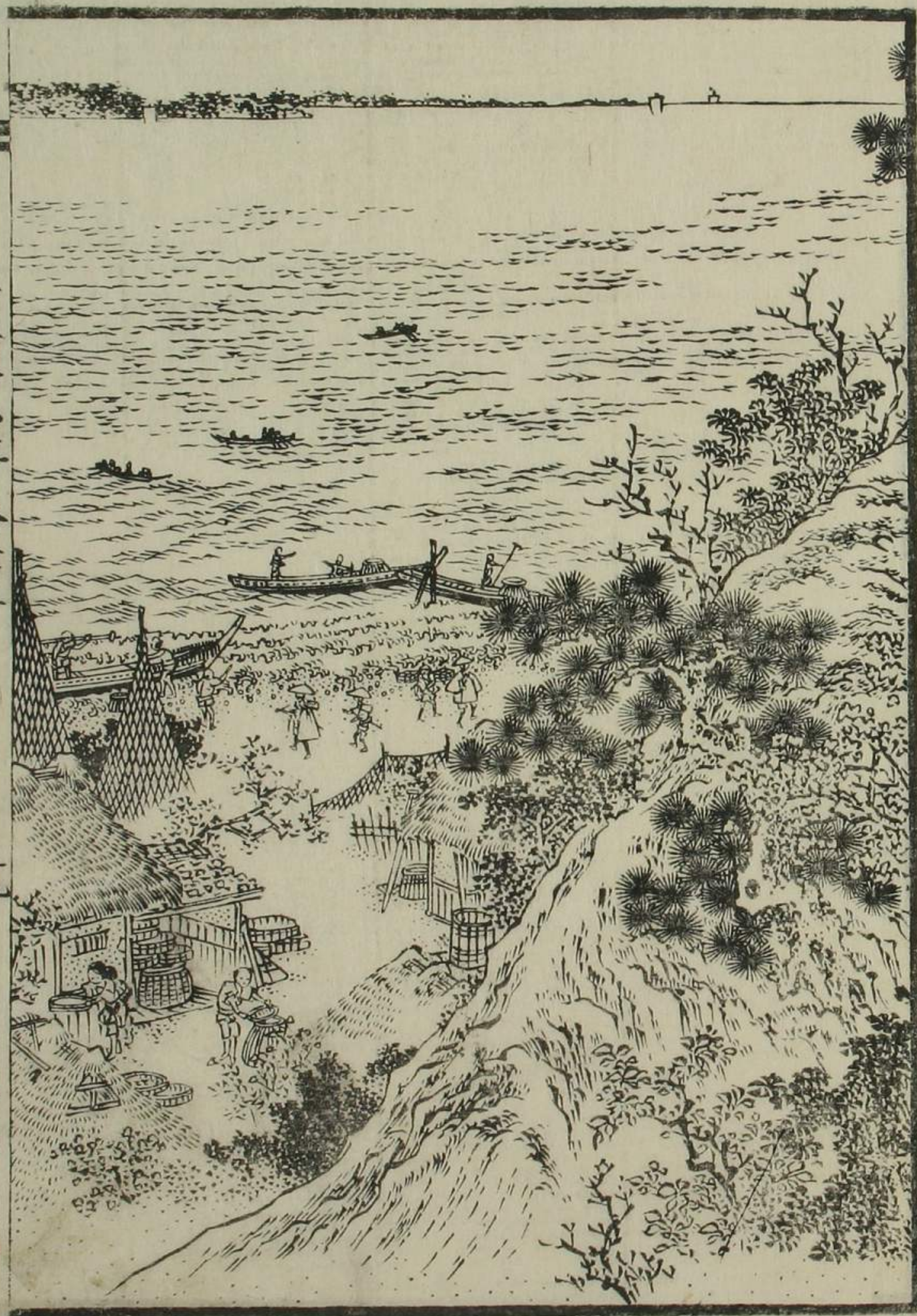
め。乾の順風起る。及び。暮直。洲崎へ寄。勢。車戦。十倍。よ  
 防。者。安房の洲崎。尉。崎。水路。八里。他。富士。西。成。の間。お  
 見。遊。姑。峯。亦。成。亥。不見。又。檣。嶋。成。の方。假。奈。澤。の。女子。の方。伊。豆。の。西。之  
 浦。の。成。亥。の方。當。れ。り。あ。皆。安。房。の。洲。崎。より。眺。望。の。方。位。有。恁。れ。相。摸。の。三  
 浦。より。洲。崎。小。船。を。寄。る。時。乾。を。め。順。風。と。ま。又。大。磯。の。成。の方。兩。降。山。嶺。の。成。の  
 方。之。崎。の。成。亥。の方。と。知。る。べ。然。五。十。子。の。城。より。出。て。船。り。里。見。と。伐。ん。と。る。安。房。の  
 迂。遠。ゆ。水路。反。て。近。く。鹿。山。を。目。標。ゆ。上。總。の。浦。へ。寄。る。も。倒。小。便。路。を  
 走。れ。も。徑。小。稻。村。の。城。を。攻。落。さ。す。欲。り。あ。非。如。迂。遠。く。も。我。風。濤。の。帮。助  
 あれ。速。中。て。障。り。る。あ。必。勿。狐。疑。あ。い。と。の。不。定。正。顯。定。の。感。服。し。く。  
 欽。び。の。も。わ。れ。俱。小。一。唱。之。歎。して。い。と。憑。く。思。ひ。り。姑。且。て。風。外。の。又。安。房。の。方。を  
 うち。眺。め。る。百。中。と。喚。ひ。て。汝。那。を。知。り。や。と。い。く。遙。く。指。さ。せ。百。中。も。亦。ゆ。と



見よ。小子眼明るべし。見る所は是を教ふと請問。風外又指示して。知よ。那  
よ。他を見よ。洲崎の方小隠々。一道の黒氣あり。是則。那里不反忠の者ありて。  
必。両公の戦ひを次見ん。翌よりして二日の内。其吉左右と少く。定正。珍重  
珍重と。祝まをうち少く。定正。顕定。い。欽。堪。され。憶。至。妙。々。と。稱。へ。意  
氣。相。共。揚。々。う。あ。れ。も。風。外。の。術。不。誇。れる。氣。色。も。定。正。と。顕。定。を。相。倣。め。く  
諭。を。申。す。両。公。の。盛。徳。高。向。運。都。々。か。の。如。く。ま。れ。も。天。機。の。謹。て。漏。れ。ず。今。此。言。の  
戲。れ。の。功。人。よ。る。知。せ。ぬ。を。今。り。も。時。移。り。ぬ。猶。長。居。る。あ。る。士。卒。不。疑。ふ。者。あ。ら  
む。と。く。還。り。ぬ。か。と。そ。が。た。れ。定。正。顕。定。是。も。然。之。と。心。の。俱。別。と。言。也。又。公。を  
師。父。の。徳。義。忘。る。べ。き。口。の。儘。不。相。別。れ。て。再。會。を。許。され。ぬ。特。不。送。憾。の。至。り  
ん。但。一。百。中。の。あ。る。ゆ。え。軍。功。あ。る。重。く。用。ひ。て。俸。禄。思。ひ。の。隨。る。べ。し。と。公。を。風。外  
少。あ。む。否。と。他。の。亦。純。袴。の。為。小。西。韃。されて。勢。利。の。奴。と。言。と。樂。に。權。且。摩

下。小。隨。より。値。遇。の。奇。縁。と。果。せる。と。い。ひ。百。中。少。う。ち。向。ひ。て。小。子。も。勉。め。今  
番。の。闘。戦。合。期。して。汝。兩。侯。の。與。不。微。功。あ。る。速。不。辭。去。る。舊。山。不。還。る。一。古。の  
人。の。父。ら。一。日。除。目。を。見。れ。二。年。道。心。を。損。き。是。を。慎。め。慎。め。と。叮。寧。に。誠。に。百  
中。唯。々。と。心。して。身。を。起。し。先。不。立。く。卒。と。下。山。を。い。て。定。正。と。顕。定。の。則。伴。當  
從。へ。徐。々。山。を。下。る。程。小。風。外。も。亦。後。不。跟。く。洞。の。邊。まで。送。り。け。り。然。に。憲。儀。重。勝  
等。の。餘。あ。ま。き。從。ひ。來。ぬ。兩。家。腹。心。の。近。習。ま。俱。不。風。外。道。人。の。奇。風。の。術。と。目  
撃。せ。る。者。都。て。信。せ。ざる。は。く。信。る。異。人。の。資。助。あ。れ。ば。今。番。の。征。伐。水。陸。共。大。勝  
大。利。疑。ひ。る。と。思。へ。漫。ふ。ち。笑。れ。て。俱。ま。あ。る。勇。ま。け。信。而。定。正。顕。定。の。山。を  
下。り。馬。不。跨。く。五。十。子。の。城。へ。還。る。不。御。不。代。垢。離。執。り。け。り。近。習。等。あ。ま。來。て。待。々。在  
り。這。餘。の。士。卒。も。皆。從。を。馳。々。五。十。子。俱。一。け。り。信。而。定。正。六。五。十。子。の。城。へ。還。ゆ。と  
そ。儘。先。有。司。を。召。さ。せ。赤。髭。百。中。が。事。信。々。と。早。く。あ。ち。を。召。され。ば。有。司。則。奉





十九

八代傳九輯卷三十五



山外  
 谷山小風  
 外房總の  
 便路と指  
 南

八代傳九輯卷三十五



猛可まほしく百中ひゃくちゆうが總所そうじよを準備じゆんび多く夕饌ゆせき中酒ちゆうしゆを薦すすめらるるも、介程さいぢやう不ふ定ぢやう正ぢやう顯けん定ぢやう。定ぢやうの日の日ひ在あ城じやうの諸將しよしやうをも、赤あか岳たけ百中ひゃくちゆうが事ことの顛末てんまつ其師そのし風外ふうがいが奇風きふうの支しまで、悄せうやうつひ告知ちやくちされ、大家だいが感かん下げ且かつ飲いんびく。憑たもく思おもひぬる。左右さうぶも程ぢやうの日の昔むかし春はるけれ。定ぢやう正ぢやう顯けん定ぢやう同席どうせきも、憲重けんじゆう重儀じゆうぎ東良とうりやう重勝じゆうしやうも四個よんごの大夫だいつをの侍さむらいを、那風外なふうがいが教しゆ小据せうこも、水戦みづせんの密議ひみつぎも、則すなはち赤あか岳たけ百中ひゃくちゆうを這席このせきへ召寄めいよせ、猶なほ疑ぎふ。試しるこ百中ひゃくちゆうも是こゝを辨わん。意表いひやう小出こでる。其言果そのごんと又また百中ひゃくちゆうが、數かずるこらねども、我われ系生けいせいを御ご師しの告つ示しを、小隱せういんを、就つぐ又また一いつ談だんは、愚父ぐふが故朋こほう輩はいる。其兵そのへい毎ごとの子弟こぢていの武藝ぶぎも、男悍おとこ人の勝かちれも、良主りやうしゆ小遇せうご孫そんが世よを托たくて皆野みな武士ぶしの、今いまも親おやの由縁ゆゑんと、在下のちと刎頸わんけいの交まじり孰たしも切きる兵へい、毎ごと甲か乙おつの慮りよ百有餘ひゃくあま名な、龜かめ姑こ峯かみ武澤ぶさくの向むか居ゐり、他た等ら伊豆いづの海うみ邊へ小生せうせい百有餘ひゃくあま名な、皆みな水戦みづせん不ふ熟じやく、在下のち兩りやう三日さんじつ身みの暇ひまを賜たまひ、夜よを日ひ小接せつて。

那地なぢ不到ふたう、薦すすめ、御方ごほう不ふ俱く、水戦みづせんの時とき小臨せうりんも、必かなく做なる。千騎せんきの勇士ゆうし不ふ勝かちるべし、と公こうを定正ぢやうぢやううち、少せうてを要えうあると、既すなはち出陣しゅつぢんの日ひと、ト定ぢやうめ、八日はちじつの程ぢやうもあ、其期そのき小合あん、欵くわん甚しん麻まと、と向むかへ、百中ひゃくちゆう然しかし、在下のち那死な友とも等らと伴ともて、徑ぢやう不ふ相あ摸もる。新井しんせいの城じやうへ赴おもひ、船ふね三さん十じゆ艘さう借かり、必かなく八日はちじつの閉戦へいせん、先せん駈かを仕つかへ、那里そのこゝの城じやう王わう三浦さんぽ殿てんへ、其その船ふね毎ごと柴しば船せん硝せう火くわ積つ入いれて、百中ひゃくちゆう不ふ渡わた、と仰遣おほせひ、か、と請こふを定正ぢやうぢやう左右さうぶも、饒にぎさは先せん顯けん定ぢやうと商量じやうりやうして、且かつ憲重けんじゆう重儀じゆうぎ東良とうりやう重勝じゆうしやうも、意見いけんと向むかふ、四老しろう臣しんの別議べつぎも、皆みな便宜べんぎの、と、登時とんじ顯定けんぢやう、百中ひゃくちゆう向むかひ、目今いまの一いつ談だん、定ぢやう不ふ宜い、我軍わがぐん兵へいも、あとの、水戦みづせん不ふ熟じやく、稀まれに熟じやく、汝なんぢ們ら先鋒せんぽう、小找せうも、不ふ宜い、と、汝なんぢが船ふねを借かり、欲ほむ、新井しんせいと我屬わがぞく城じやうも、那里そのこゝの城じやう、王わう三浦さんぽ陸奥りくお守し義同ぎどう、父子ふしの世よ不ふ知し、る勇士ゆうしと、水戦みづせん不ふ熟じやく、必かなく是こゝを、明日あした使し者しやと。



遣<sup>つる</sup>し<sup>と</sup>夙<sup>あ</sup>く<sup>あ</sup>謀<sup>あ</sup>し<sup>あ</sup>合<sup>あ</sup>せ<sup>あ</sup>む<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>京<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>百<sup>あ</sup>中<sup>あ</sup>額<sup>あ</sup>衝<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>美<sup>あ</sup>く<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>ん<sup>あ</sup>左<sup>あ</sup>右<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>事<sup>あ</sup>御<sup>あ</sup>符<sup>あ</sup>  
 節<sup>ふ</sup>と<sup>ふ</sup>賜<sup>あ</sup>ふ<sup>あ</sup>御<sup>あ</sup>航<sup>あ</sup>幡<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>借<sup>あ</sup>さ<sup>あ</sup>せ<sup>あ</sup>ぬ<sup>あ</sup>付<sup>あ</sup>節<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>く<sup>あ</sup>那<sup>あ</sup>里<sup>あ</sup>中<sup>あ</sup>疑<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>ゆ<sup>あ</sup>ひ<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>既<sup>あ</sup>不<sup>あ</sup>  
 ち<sup>あ</sup>借<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>船<sup>あ</sup>不<sup>あ</sup>標<sup>あ</sup>識<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>何<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>敵<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>御<sup>あ</sup>方<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>分<sup>あ</sup>別<sup>あ</sup>せ<sup>あ</sup>ぬ<sup>あ</sup>之<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>願<sup>あ</sup>ひ<sup>あ</sup>す<sup>あ</sup>  
 る<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>請<sup>あ</sup>へ<sup>あ</sup>顯<sup>あ</sup>定<sup>あ</sup>點<sup>あ</sup>頭<sup>あ</sup>現<sup>あ</sup>脱<sup>あ</sup>落<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>用<sup>あ</sup>心<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>新<sup>あ</sup>井<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>城<sup>あ</sup>へ<sup>あ</sup>豫<sup>あ</sup>よ<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>火<sup>あ</sup>急<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>  
 軍<sup>あ</sup>事<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>辨<sup>あ</sup>せ<sup>あ</sup>為<sup>あ</sup>符<sup>あ</sup>節<sup>あ</sup>既<sup>あ</sup>不<sup>あ</sup>遞<sup>あ</sup>與<sup>あ</sup>し<sup>あ</sup>有<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>汝<sup>あ</sup>中<sup>あ</sup>今<sup>あ</sup>宵<sup>あ</sup>取<sup>あ</sup>せ<sup>あ</sup>む<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>之<sup>あ</sup>定<sup>あ</sup>正<sup>あ</sup>  
 由<sup>あ</sup>亦<sup>あ</sup>公<sup>あ</sup>や<sup>あ</sup>早<sup>あ</sup>我<sup>あ</sup>諸<sup>あ</sup>方<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>軍<sup>あ</sup>兵<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>催<sup>あ</sup>促<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>折<sup>あ</sup>々<sup>あ</sup>大<sup>あ</sup>小<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>船<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>駈<sup>あ</sup>合<sup>あ</sup>せ<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>水<sup>あ</sup>  
 戰<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>所<sup>あ</sup>用<sup>あ</sup>不<sup>あ</sup>做<sup>あ</sup>ま<sup>あ</sup>武<sup>あ</sup>藏<sup>あ</sup>下<sup>あ</sup>總<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>諸<sup>あ</sup>川<sup>あ</sup>思<sup>あ</sup>ふ<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>似<sup>あ</sup>ぞ<sup>あ</sup>淺<sup>あ</sup>船<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>稀<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>水<sup>あ</sup>戰<sup>あ</sup>中<sup>あ</sup>巨<sup>あ</sup>  
 船<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>快<sup>あ</sup>船<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>便<sup>あ</sup>利<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>ま<sup>あ</sup>れ<sup>あ</sup>早<sup>あ</sup>く<sup>あ</sup>敵<sup>あ</sup>不<sup>あ</sup>合<sup>あ</sup>す<sup>あ</sup>れ<sup>あ</sup>汝<sup>あ</sup>信<sup>あ</sup>れ<sup>あ</sup>航<sup>あ</sup>幡<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>ヨ<sup>あ</sup>ク<sup>あ</sup>餘<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>  
 ぬ<sup>あ</sup>され<sup>あ</sup>新<sup>あ</sup>井<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>城<sup>あ</sup>中<sup>あ</sup>借<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>船<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>山<sup>あ</sup>内<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>航<sup>あ</sup>幡<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>用<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>好<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>せ<sup>あ</sup>ぬ<sup>あ</sup>或<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>又<sup>あ</sup>那<sup>あ</sup>家<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>  
 航<sup>あ</sup>幡<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>借<sup>あ</sup>さ<sup>あ</sup>ぬ<sup>あ</sup>左<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>右<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>せ<sup>あ</sup>よ<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>諭<sup>あ</sup>其<sup>あ</sup>百<sup>あ</sup>中<sup>あ</sup>欽<sup>あ</sup>ひ<sup>あ</sup>美<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>然<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>在<sup>あ</sup>下<sup>あ</sup>明<sup>あ</sup>日<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>曉<sup>あ</sup>  
 天<sup>あ</sup>不<sup>あ</sup>當<sup>あ</sup>城<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>立<sup>あ</sup>去<sup>あ</sup>く<sup>あ</sup>邈<sup>あ</sup>姑<sup>あ</sup>峯<sup>あ</sup>路<sup>あ</sup>へ<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>死<sup>あ</sup>ゆ<sup>あ</sup>目<sup>あ</sup>今<sup>あ</sup>兼<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>御<sup>あ</sup>意<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>如<sup>あ</sup>く<sup>あ</sup>水<sup>あ</sup>戰<sup>あ</sup>中<sup>あ</sup>

巨<sup>あ</sup>船<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>淺<sup>あ</sup>船<sup>あ</sup>が<sup>あ</sup>進<sup>あ</sup>退<sup>あ</sup>自<sup>あ</sup>由<sup>あ</sup>な<sup>あ</sup>れ<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>我<sup>あ</sup>師<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>奇<sup>あ</sup>風<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>帮<sup>あ</sup>助<sup>あ</sup>ひ<sup>あ</sup>巨<sup>あ</sup>船<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>亦<sup>あ</sup>走<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>淺<sup>あ</sup>  
 船<sup>あ</sup>不<sup>あ</sup>釣<sup>あ</sup>く<sup>あ</sup>快<sup>あ</sup>く<sup>あ</sup>且<sup>あ</sup>巨<sup>あ</sup>船<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>勁<sup>あ</sup>風<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>覆<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>ぬ<sup>あ</sup>及<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>利<sup>あ</sup>あり<sup>あ</sup>敵<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>命<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>其<sup>あ</sup>淺<sup>あ</sup>船<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>  
 皆<sup>あ</sup>焼<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>必<sup>あ</sup>ひ<sup>あ</sup>む<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>之<sup>あ</sup>定<sup>あ</sup>正<sup>あ</sup>笑<sup>あ</sup>け<sup>あ</sup>然<sup>あ</sup>也<sup>あ</sup>々<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>領<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>く<sup>あ</sup>密<sup>あ</sup>議<sup>あ</sup>い<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>不<sup>あ</sup>果<sup>あ</sup>く<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>  
 顯<sup>あ</sup>定<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>白<sup>あ</sup>石<sup>あ</sup>重<sup>あ</sup>勝<sup>あ</sup>今<sup>あ</sup>宵<sup>あ</sup>百<sup>あ</sup>中<sup>あ</sup>不<sup>あ</sup>遞<sup>あ</sup>與<sup>あ</sup>し<sup>あ</sup>汝<sup>あ</sup>信<sup>あ</sup>れ<sup>あ</sup>航<sup>あ</sup>幡<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>事<sup>あ</sup>及<sup>あ</sup>明<sup>あ</sup>日<sup>あ</sup>  
 新<sup>あ</sup>井<sup>あ</sup>へ<sup>あ</sup>使<sup>あ</sup>者<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>立<sup>あ</sup>す<sup>あ</sup>義<sup>あ</sup>同<sup>あ</sup>不<sup>あ</sup>謀<sup>あ</sup>し<sup>あ</sup>合<sup>あ</sup>す<sup>あ</sup>百<sup>あ</sup>中<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>事<sup>あ</sup>悠<sup>あ</sup>々<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>命<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>  
 定<sup>あ</sup>正<sup>あ</sup>亦<sup>あ</sup>大<sup>あ</sup>石<sup>あ</sup>憲<sup>あ</sup>重<sup>あ</sup>憲<sup>あ</sup>儀<sup>あ</sup>今<sup>あ</sup>宵<sup>あ</sup>百<sup>あ</sup>中<sup>あ</sup>取<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>死<sup>あ</sup>他<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>路<sup>あ</sup>費<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>事<sup>あ</sup>又<sup>あ</sup>戰<sup>あ</sup>  
 財<sup>あ</sup>帛<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>乞<sup>あ</sup>京<sup>あ</sup>さ<sup>あ</sup>大<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>有<sup>あ</sup>司<sup>あ</sup>不<sup>あ</sup>傳<sup>あ</sup>へ<sup>あ</sup>よ<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>之<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>百<sup>あ</sup>中<sup>あ</sup>推<sup>あ</sup>辭<sup>あ</sup>す<sup>あ</sup>要<sup>あ</sup>せ<sup>あ</sup>む<sup>あ</sup>在<sup>あ</sup>下<sup>あ</sup>只<sup>あ</sup>  
 身<sup>あ</sup>單<sup>あ</sup>少<sup>あ</sup>二<sup>あ</sup>十<sup>あ</sup>里<sup>あ</sup>有<sup>あ</sup>餘<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>旅<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>路<sup>あ</sup>費<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>賜<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>用<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>所<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>況<sup>あ</sup>戰<sup>あ</sup>財<sup>あ</sup>帛<sup>あ</sup>  
 る<sup>あ</sup>之<sup>あ</sup>聊<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>望<sup>あ</sup>か<sup>あ</sup>ず<sup>あ</sup>只<sup>あ</sup>符<sup>あ</sup>節<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>御<sup>あ</sup>航<sup>あ</sup>幡<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>預<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>ま<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>事<sup>あ</sup>足<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>ん<sup>あ</sup>身<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>  
 暇<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>賜<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>べ<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>之<sup>あ</sup>定<sup>あ</sup>正<sup>あ</sup>顯<sup>あ</sup>定<sup>あ</sup>其<sup>あ</sup>廉<sup>あ</sup>直<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>感<sup>あ</sup>し<sup>あ</sup>強<sup>あ</sup>む<sup>あ</sup>憲<sup>あ</sup>重<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>憲<sup>あ</sup>儀<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>  
 又<sup>あ</sup>重<sup>あ</sup>勝<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>東<sup>あ</sup>良<sup>あ</sup>も<sup>あ</sup>這<sup>あ</sup>賢<sup>あ</sup>才<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>ゆ<sup>あ</sup>より<sup>あ</sup>實<sup>あ</sup>不<sup>あ</sup>幸<sup>あ</sup>甚<sup>あ</sup>くと<sup>あ</sup>稱<sup>あ</sup>え<sup>あ</sup>疑<sup>あ</sup>ふ<sup>あ</sup>者<sup>あ</sup>







其も理のあ言をり那秋毎小禽を捉る者を見よ必あへ友鳥の渡るべし  
 豫より相定めらるるわねども媒鳥を出し措く死の野の鳥早く其敵軍を  
 送る昔春以来桂方羽籠小粘ぬる況戰場の蒞む者は是存亡の境  
 然ハ那城内の士卒はあ天大将品なる者といふ吉凶禍福を占問んと必  
 末々大角が楯を圓の志貝ト粘ぬ楯る者あて已死汝の逆是等のうを  
 思量り一所行るるを尚危しとて卑下をぬる才の誇らぬ萬一の小心小を  
 あらむむとと解れて毛野の額を倒し御注疏の至當至妙る又高は死より  
 もる畏むの素をいれ就て大角が揃る所既ぬれぬ情地は汪進仕ら送ら  
 け申洲崎の快船の那地を便宜の浦に留措く該ふいへる船どてせえ上  
 けてん然ハ其告あむ折智勇兼備りる一個の兵頭小遣兵百五六十名  
 比皆楫取の技小熟るるを従せき情地那地へ遣り大角よく敵と欺る

なりとも又是等の帮助をれば必ひぐ死す所ありといへ義成主又領はく亦我  
 よあるぬら其折大角の帮助を死兵頭内堀内雜魚太郎貞住了七宜  
 うら他の曩ふ貞仍不従り千代丸圖書助豊俊並み真里谷武田と征伐の  
 折は尤に戦功あり然れども其武勇不誇る都て貞仍の指揮を據りて  
 せざるにやと云ふ死他の上總不所要ありて推津の城に在留されぬの恩劇を  
 知りて必急然りかり來るべし其見余の折情地を命せ然りとも人小強あると  
 向れて毛野又答る事那城内貞住のりも臣等傳安ふいとも実一人當千此  
 勇士多しハ豫知る所人其御撰擇よ優ま者やいれといへる義成主合は天  
 就て赤一説あり素藤が逆徒たり那千代丸豊俊の曩ふ貞仍直元生均  
 了小あける折我思ふやあれそ儘那身を貞仍不関け置られ今も猶圍圍中  
 在り今も不豊俊先非と悔て則堂管貞仍父子不就て只管不恩赦願ふ



大方作方轉...

文治堂...

其情願の趣ハ這回の役由従事。今も死刑を寛容の徳澤報ふ所死をせ  
せむ欲むとの分。あの美昨日貞翁が信乃道節莊介小文吾現八等不消息  
貞住今上總不在れ告知甚不便入和殿宜く望え上げ。執成を憑むと  
則我の告げかども卒介赦免の制度不及。汝の美を何と思ふと向れて毛  
野ハ欽ハ堪む情地ハ答稟を。臣等が豫計の所其一條ハあり。既ハ  
稟上げ如く敵地ハ向者不遣を者、大師大角の三更ハ猶足らざるゆへ今  
一人伴りて敵ハ降参去者を作り立ち事とゆむ。十二分とらふ。其降  
人ハ真里谷氏歎然とぞい又千代九氏歎開ハ孰れ一旦罪を被りて館と怨と  
あつた情由ある者ふひるバ敵ハ信容せられ。然れども真里谷信昭主ハ前朝  
病死の夢あり千代九氏ハ罪重り久しく圍圍ハ龍措るハ真実歸服の心

くハ饒して使せぬ。あつた情由ある者ふひるバ敵ハ信容せられ。然れども真里谷信昭主ハ前朝  
仁政を深くも感し。今番の役由従事。命を涯りて徳澤報答を。願ハ稟まは是則御盛徳の致す所ハ。那罪を恩免ありて敵方ハ降人ハ  
一役ハ使せぬ。臣等情地ハ。那ハ計畧を授けられ。敵の衆艦を焼せぬ。美をいせ。と請薦れ。義成主ハ然々々。又點頭。那豊俊ハ逆心の初  
衍心。素藤が為ハ水人ハ做り。且那友。罪免れ。と思ひ。真里  
谷信昭武田信隆等と俱ハ一旦籠城を。根柢ハ。謀叛ハ。且數  
世榎本の城主。我其刑戮を。時。他亦先非。悔ハ罪  
謝して恩赦願ふ。虚歎。汝藏人ハ宿所。鞫問。実情。其  
我必他ハ罪を饒え用。以て兵の黄蓋ハ故轍を踏せ。敵ハ謀り。功。其  
賞。榎本の城地。返。與。美を堀内藏人ハ告。豊俊ハ示。ね

大方傳...

廿四

文治堂...



と言可寧下仰光の毛野の悦び兼て尋ね給ふ御仁政の上の御仁但  
 件の御使を臣も一個奉らる外の人もなき御仁の義兄弟の内誰をも又一人を  
 添さる御豊俊愈美服して計策に従ふと稟し他もなき敵方へ情地不  
 遣す使の千代九が舊臣の宅眷と伴して音音曳る軍節をこそ相応しく  
 引けれ他もは是女流を武藏の水邊の生育へは今戦世の俗習ゆ  
 船の上の掙は自由とゆふと豫守ける勇婦毎の必成まの然れども  
 其密使を遣す只今の尚早の敵の這方へ艦を找る一兩日前そゆれ事  
 急を折る思ひの敵の思慮ある者と必や信交れ疑ふ  
 暇を給へ信れいそむいへ先音音曳ると召る臣等と俱に情やふ  
 貞の許遣し音音曳則豊俊の對面まへ送る面善とむいへ後  
 事と謀る折不便ふとゆふと言送る請ふ毎の義成主謀るゆその

美我のあらゆり。遊莫音音曳を召るは是密策の上る物々有  
 司の下知きて龍田の遣去たのあむ。是汝も消息して召て且那婦人  
 名が来ぬ折俱して藏人許赴る人怪むとる。既中て那地の大角  
 大角の事大際成る。又千代九豊俊を使者と欲する事十二分謀る  
 と思ふ必勝の用心精密定脱落た所ゆと稱へは毛野が長  
 由兼る目今の御意のあら。只愚意の致す所は敵の戦艦を焼く。御  
 方の間者。只一隊をうんも。幫助あふ如とる。非如大角が那地を謀る所  
 成るとも。其一方のそゆり。燬を免る敵をへ。風が那玉をり。這里も  
 起し易り。火術の敵の後より。必做ま死事なれ心許るゆい。一旦叛た  
 了より。圍圍の中を歴する千代九氏を信る時御用の達。況豫  
 知召る。河鯉の政木大全及石龜次圍大鯉。今這息劇を人信る。



八代傳九輝卷之三

文鏡秘府論

知るより由るに左右川の底の水屑あかりに流れ只這三子のとるを又那落點有  
種ハ道節毛野が復讐言を幫助しその流はえりより定正主の憎む那身危  
かりけれ穂北の莊を自焼し梢地宅着を推考御黨と共侶不往方も知  
るりけるの御當依介が忠告も臣等ハ夙く少知りあは君も亦間謀見の注進  
あり知し召れしるも介も有種其凶度を臣等ハ名も告知して當家の仕  
願もあはぬ那五十子の討ち待たし立ちりしと羞方欲進退勇るる似し  
いも力を揃りて戦殺して御黨さへも殺さ開ハ只匹夫の勇め必是眞  
勇のせざる所ふの其一事を論じあは義士毎てその義中も有種ハ  
一需要時日陰ふ立ちまて命あはるるに紛れもあはれ慰る由ハも大  
次園太の存亡も又今ハ不料難き是さあは親兵衛が信今ハつえ  
眼を義我兄弟等と共侶うち歎けぬと稟せし御聆入るに及て益もたは

たは諒言ハ言ハ言ハ言ハ言ハ千代九氏のゆふよりて坐す嗟嘆堪はれはの  
美及びひびはとらふも又歎むが義成王ハ然てそとるり心々俱ハ惘然し  
あをうち紛ららう咳はせ登る毛野然も痛む歎け七八個の賢士をゆ  
るまら我薄徳ハ過れば又開が上ハ忠孝義勇を徳大全餘之七等を添  
さる造化の小兒の配劑も涯あるるべと悟り我身を省れ歎ぬも  
歎くも思ハ何と耐ゆるハ毛野ハ畏る額を衝て御誼感佩はり  
莫御盛徳ハ比れ臣等のもも足るべもはる天縁実ハ盡はるあは死せりと  
思ハ孝嗣等の程經て参り仕る日は足あはは歎けり  
千代九氏の一美ハ音音日等と召させあは當要といはけりといは義成王又  
然と心て開ハ密策ハ縁らる前も既ハわはれと有司ハ命まら其  
進退ハ左も右も汝等ハ任用せん信乃道節莊介等約莫五名の美我兄弟ハ

八代傳九輝卷之三

文鏡秘府論



汝我這旨を修へ。術く隨意相計ひて。昨宵の疲勞もあらん先退りい  
へと。權且暇を賜ひ六毛野の稍退れ。頃日當城内を賜り。僞居の耳房  
かへ來り。則信乃道節莊介小文吾現八を與る閑室を喚集て。昨宵、大  
と大角を悄地不武藏の柴濱へ遣りける事の顛末又千代九豊俊の事就て  
毛野が坐守策ありと。音音曳の單節等と使ふ死ゆ。あれが先當城へ召  
まへ死意味の恁々是より。館の仰箇様々々と言送も。耳は生れれば大  
士は皆相歡びて事の便宜を商量を。當下道節が公。大阪は是我黨第一  
番の智囊裏るれば然るの計較の倣一易かるる。却大角の思ふ倍く  
、大師をよく説果しける其言と今具ふ。今具ふ。蘇秦張儀を學べて妙り  
定ふ感心々々と。答に莊介點頭。然る那人の詞寡く。いかに當るこ  
。這温順兒あられ。敵地不造り。憶も馬脚を露を失あむ。開を擇出

せ大阪の配りも亦妙なり哉と俱稱。已され。現八も亦。大村の壁  
返り。山猫を對治して。親の怨を復れ。後い。目覚。拵を。と  
のく人大。只文学礼讓の人との思ふ。然るを。這回の大戦大殺義  
兄弟。拔萃て必や花や。武勇の奉動。わんご。と。小文五口。推林。め  
那美。大師。大村。必成。事。其頭の批評。且。當要。音  
音の媪。を。召。一。信乃。諾。然。開。秘。事。也。  
且館の仰もある。只消息を。奴隷使を。所詮。甲乙。と。い。ん。よ  
。大田和殿と。咱。と。這御使を。奉。今。瀧。赴。老。館。の。御。安。否。と  
伺ひ。且。那。媪。不。秘。策。を。示。て。俱。一。日。風。か。り。來。て。い。へ。小。文。吾。介  
。と。答。ふ。毛。野。も。其。の。議。を。好。く。応。ず。兩。兄。那。里。へ。死。玉。の。事。の。捷。徑。の。上。り。前  
。月。水。陸。の。人。馬。調。煉。以。來。久。く。老。館。に。見。參。ふ。も。便。是。一。事。兩。用。之。宜。々



計ひぬねとく。且勞ひ且急せ。道節社介現八も俱ふ。談の從ひて大塚大田  
 が御用多。今より瀧田へ赴く。而家老東共荒川小告んと。まの美を毛野相  
 譚ふ程。信乃小文吾の邊へ。身装し。伴當を俱へて瀧田赴けり。介程小  
 大塚信乃大田小文吾の連り。路次をいそぐ。程近く。辛く。その日  
 時の左側小瀧田の城へ。其宿所へ立寄。隨即義実主の隠館へ  
 参上り。馳て當番の近習小湊目鱗船員六郎等。就く。色々と告え上げ  
 る。義実主執ひて。を儘召させ。對面。却宣。前月煉兵の事。あつ。より  
 老久く。汝等と見たり。亦憶り。も。軍事起り。愈疎。洵。多。め。る。美  
 も。あ。つ。と。芽。生。や。つ。つ。不。這。回。八。州。の。兩。管。領。敵。多。せ。れ。て。數。萬。の。大。兵。  
 水陸より。推寄せ。多。つ。と。風。聲。も。あ。つ。美。の。安。房。殿。を。い。よ。杉。倉  
 武者助。と。告。つ。て。其。大。略。と。知。り。其。事。愈。實。を。致。と。問。き。信。乃。先

答る。中。豫。敵。地。の。い。ひ。當。家。の。間。諜。の。兵。每。立。替。り。入。代。り。注。進。漸。々。其。事  
 多。く。も。防。戰。の。御。准。備。も。い。ひ。小。文。吾。語。を。續。け。敵。の。大。軍。遠。く。自。推  
 寄。多。く。と。一。條。の。事。極。め。て。実。中。紛。れ。多。く。も。渡。莫。館。の。御。雄。武。と  
 一。戰。を。遂。ぬ。數。萬。の。大。敵。美。る。船。と。返。り。稀。多。く。慰。め。直。展。を。義。実。主。に  
 うち。合。笑。ふ。否。と。勝。負。の。人。の。時。運。の。前。より。必。と。思。ひ。決。む。あ。つ。絲  
 どの。幸。ゆ。て。我。子。の。思。ふ。と。且。汝。等。の。羽。翼。も。て。毛。野。の。軍。師。の。任。小。當。り。又。汝。等  
 公。の。御。使。使。と。敵。と。俟。と。と。制。度。せ。れ。と。い。ふ。の。あ。つ。も。つ。を。執。り。思。ふ。我。風。く  
 家。督。と。義。成。の。渡。り。以。來。浮。世。の。事。小。掛。念。せ。ぬ。隱。逸。者。を。在。る。多。く。は。折。中。も。安。然。と。い。ふ。も。苦。も。る。く。樂。も。欲。り。甘。を。軍。旅。の。事。小。耳。振。立。て。具。小。少。く  
 づ。の。思。ひ。も。但。大。江。親。兵。衛。の。竟。あ。の。期。小。遇。さ。る。の。遠。憾。は。涯。り。然。も。天。道。の  
 盈。と。虧。と。又。盈。し。他。の。程。歷。止。と。還。る。も。美。る。何。う。あ。つ。今。ゆ。り。又。思。ひ。益



る。汝等の夜と多く日とる。軍議の暇あぶるは。信両個うち連立て我を訪る故  
り。あつと。同れて。二天士感謝不堪と姑且して。信乃が答るや。最辱に御懇命臣等が  
か。り。束ふける。然し。くる。み。ひ。び。館。も。毛。野。も。薦。め。ま。つ。り。計。策。ひ。か。其。美。お。就。て。立。音。音  
等。御。用。あり。臣。等。其。脚。使。を。奉。り。く。先。折。を。さ。め。ひ。先。尊。體。の。御。安。否。を。伺。ひ。な  
る。死。為。の。拜。見。を。願。ひ。ま。り。あ。は。と。い。ひ。義。実。王。點。頭。て。開。亦。要。あり。る。ん。か。掖。留。る。  
心。似。たり。那。音。立。日。等。媳。婦。等。今。か。る。代。四。郎。の。信。を。待。托。て。果。敢。る。め。を  
思。ふ。る。ん。か。何。等。の。所。要。り。知。れ。ぬ。も。代。四。郎。代。り。一。役。中。本。意。お。稱。人。又。妙。真。を  
親。兵。衛。を。ひ。く。と。日。毎。待。り。是。も。亦。不。便。に。汝。等。宜。く。慰。め。夕。陽。へ。既。没。既。  
退。り。く。所。要。を。果。ね。と。只。願。ひ。そ。が。立。あ。へ。二。天。士。共。侶。お。立。ま。り。考。左。右。を。退。り  
む。又。小。文。五。口。答。る。や。否。音。立。音。音。お。密。議。の。反。て。暮。る。と。好。と。時。尚。早。く  
い。も。明。日。早。天。お。他。等。を。俱。く。稻。村。へ。参。り。ひ。其。折。の。辭。も。か。ら。り。あ。の。是。を

い。く。饒。さ。を。の。と。請。ふ。と。それ。好。々と。心。て。猶。も。い。そ。の。あ。信。乃。小。文。五。口。の。歎。び。と。京  
あ。の。躬。退。り。出。く。徑。小。姥。雪。の。宿。所。お。赴。く。程。小。點。燭。時。候。お。り。お。け。り。嚮。お。信。乃  
小。文。五。口。の。奴。隸。を。走。ら。せ。て。音。立。音。小。信。と。告。り。か。音。立。音。日。の。曳。も。單。に。即。終。と。ち  
歎。ひ。共。侶。お。猛。之。夕。饌。の。儲。と。る。客。あり。と。妙。真。も。早。く。知。り。て。あ。り。圍。坐。お  
入。相。の。鐘。鐃。々。と。响。く。時。候。常。より。早。に。燈。燭。の。花。の。散。さ。ぬ。奥。坐。席。搥。拂。ひ。ぬ。る  
ふ。の。日。お。開。く。稀。の。華。臥。坐。の。布。お。あ。り。さ。和。ら。ぬ。老。女。主。人。の。故。ら。執。も。漏。さ。を。老  
實。お。隅。々。山。炭。斗。角。火。盤。茶。盆。添。一。對。の。茶。碗。お。見。お。錦。の。錦。お。あ。る。巻  
物。の。取。き。煎。餅。を。消。飲。お。執。も。具。ひ。て。待。り。程。お。既。お。信。乃。小。文。五。口。の。來。り。伴。當。お  
呼。門。お。れ。音。立。音。の。躬。お。出。迎。へ。先。這。方。へ。と。奥。在。る。儲。の。坐。席。お。請。ま。れ。お。曳。お  
單。即。火。盤。を。薦。め。茶。を。看。め。云。云。と。他。一。句。我。一。句。送。の。口。誼。言。訖。れ。妙  
真。も。音。立。音。お。就。て。の。席。お。連。り。て。信。乃。小。文。五。口。對。面。し。音。立。音。と。俱。お。り。あ。る。





三十一

去の

小文五口



あの小文五口  
信乃小文五口  
夜音音音と  
密談も

おまへ

ひくと

ひとよ

おまへ

ハナハナ車巻三三



親兵衛代四郎が今番の役不立むる時、憾の方方るを、両館の憐れ  
 ひて、是より先ふと早く、照文を再度の使、京へ遣ひけり。其歎ひと諄復を感  
 涙果あつて、信乃小文吾の慰めて、今も亦老館の御懇命、箇様々々と傳へし  
 却伴當と皆宿所へ遣いて、只二天士と儲の夕饌を受ると、其後信乃小文吾の音  
 音乃三人と妙真を招聚へて告る。今日我が方來身、但是軍謀の密使、  
 毛野が館に蘆馬めり、筆書策あるより、其筆書策の箇様々々如此々々の一美  
 と、千代丸圖書助豊俊が先非と悔て死刑寛裕の報恩、今番の役不立むる欲  
 を、連り赦免と願ふ事、あつて毛野が計る所、豊俊の詭の計を、仍りせ、敵不降  
 參を請ふ折豊俊の使、刀自名二名と遣さるべし。あのみ、今明日の事、あつて  
 敵の大軍推寄、一兩日以前を好と、あられも刀自名、豊俊と面善らむ、  
 那地、到り、不使、明日堀内貞、仍許遣して、豊俊、對面せよと、あは、館の

御内意、かゝの如、但、兩個の幼息を、推乃、ゆゑ、時宜る、ね、妙真、大母、園、と、權  
 且、膝下、の、類、ひ、ひ、ひ、あ、の、美、の、別、談、を、折、も、と、あ、不、在、言、省、れ、て、宜、と  
 小文五、是を、説、示、せ、信乃、の、語、を、續、給、足、る、を、補、密、談、著、中、を、け、れ、音  
 豊、單、即、ち、額、を、衣、め、果、て、且、然、と、大、く、頭、を、拾、ひ、憶、ぢ、も、吻、と、息、つ  
 二、天、士、向、ひ、て、共、侶、不、答、る、を、數、る、取、身、の、過、分、に、兩、館、の、御、洪、恩、代、四、郎、の、  
 歎、奴、奴、等、も、御、杖、持、の、下、置、せ、を、仰、せ、れ、甄、形、の、照、る、日、不、存、か、其、御  
 衷心、の、か、ひ、も、く、悠、る、折、ら、代、四、郎、の、信、も、る、か、り、も、來、を、孰、の、日、の、命、を、捨、て、御、恩、の  
 答、も、あ、つ、と、思、へ、心、焦、燥、の、中、に、慨、し、かり、不、幸、あ、り、て、淡、花、婦、女、子、と、大、事、の、御、用、の、  
 立、を、一、期、の、執、び、の、上、に、や、れ、か、二、尺、八、分、乳、を、離、れ、て、獨、遊、を、志、し、朝、夕、と  
 ても、易、かり、憚、り、な、妙、真、姨、御、宜、く、憑、と、ま、り、と、云、口、誼、存、死、媳、婦、岳、母、答、雄  
 雄、あ、く、勇、を、信、乃、小、文、吾、の、歎、び、感、して、猶、云、と、談、す、妙、真、の、心、も、甘、涙、吐、け



信乃小文吾ふうち向ひと怨むる中。喃犬田主犬塚主言憚り多く侍れども非如館の  
 御内意を思ひ汲みたる御計。犬阪主も恨みくはる代四郎更の富山以来親兵  
 衛に就て七両館の御恩を稟され我孫とて公家わねと親兵衛は取早く御身  
 達先へて両館を見参の初も尚總角多年歳を優て素藤を征伐。正  
 多二度の大功あり其後又路遥る。京師へ使と奉り。目今家小在るをとも敵  
 へ間者遣まら。然る大事の密使小婦女子で宜かむ。憚り多ら奴家をて七  
 犬阪主の薦め稟して用ひさる。異日親兵衛がかりて。面伏る。一役の侍れ  
 船の上の技りも船長の母にけ。奴家小の刀自達か。いふ及。肉身を依介  
 ま。往る日敵地光景を注進。参り。今番の御用。小達。奴家。單。單。困と  
 宿所在りて人の釋兒を衛して。早暮。暮。依。依。員。員。事。事。情。情。心。心。の。の  
 せん恨切る。氣を胸に憶。憶。と泣沈め。驚。驚。信乃小文吾。噴。聲。耳。高。高。と。推

鎮め。信乃が先諭を。嫌。嫌。の。怨。言。言。定。定。以。以。理。理。の。の。あ。あ。わ。わ。ね。ね。も。も。犬。犬。阪。阪。が。が。薦。薦。め。め。稟  
 多。這。這。老。老。弱。弱。之。之。個。個。の。の。婦。婦。人。人。を。を。敵。敵。地。地。へ。へ。間。間。者。者。を。を。遣。遣。ま。ま。ら。ら。亦。亦。是。是。以。以。あ。あ。ら。ら。を。を。か。か。弁。弁。を。を。甚。甚。麻。麻。を。を。と  
 る。音。音。音。音。の。の。媪。媪。の。の。器。器。械。械。を。を。男。男。子。子。に。に。勝。勝。る。る。本。本。事。事。あり。あり。あ。あ。の。の。上。上。も。も。荒。荒。草。草。山。山。を。を。犬。犬。田  
 も。咄。咄。も。も。目。目。敷。敷。あ。あ。る。る。漫。漫。ふ。ふ。つ。つ。り。り。と。と。笑。笑。言。言。る。る。あ。あ。の。の。又。又。も。も。單。單。節。節。兩。兩。嬖。嬖。婦。婦。の。の。年。年。尚。尚。少。少。と  
 且。顔。顔。醜。醜。く。く。は。は。蓋。蓋。敵。敵。の。の。士。士。卒。卒。を。を。誰。誰。も。も。色。色。を。を。好。好。ま。ま。ら。ら。な。な。ら。ら。ず。ず。然。然。し。し。豊。豊。俊。俊。が。が。敵。敵。に。に。降。降。参。参。密。密。使  
 と。伴。伴。り。り。て。て。這。這。色。色。を。を。と。と。事。事。を。を。謀。謀。ら。ら。敵。敵。の。の。士。士。卒。卒。疑。疑。り。り。相。相。殺。殺。び。び。て。て。信。信。容。容。れ。れ。あ。あ。の。の。を。を。犬。犬。阪。阪。が  
 思。思。ふ。ふ。を。を。胡。胡。意。意。を。を。身。身。を。を。用。用。ひ。ひ。さ。さ。り。り。け。け。意。意。味。味。を。を。悟。悟。ら。ら。恨。恨。ま。ま。あ。あ。ら。ら。と。と。解。解。け。け。小。小。文。文。吾。吾。も。も。亦  
 ら。枉。枉。々。々。意。意。見。見。不。不。從。從。ひ。ひ。と。と。諭。諭。其。其。音。音。曳。曳。も。も。單。單。節。節。も。も。共。共。侶。侶。を。を。慰。慰。め。め。盡。盡。ま。ま。誠。誠。の。の。言。言。の。の。葉。葉。あ  
 かの。涙。涙。の。の。露。露。の。の。玉。玉。枝。枝。の。の。除。除。れ。れ。と。と。輾。輾。が。が。た。た。妙。妙。真。真。才。才。自。自。を。を。拭。拭。ひ。ひ。て。て。小。小。達。達。の。の。我。我。身。身。の。の。不。不。肖。肖。を。を。恨。恨。む  
 も。外。外。は。は。は。は。ね。ね。も。も。親。親。兵。兵。衛。衛。が。が。人。人。の。の。先。先。に。に。た。た。る。る。功。功。を。を。思。思。ひ。ひ。召。召。れ。れ。る。る。切。切。と。と。人。人。數。數。加。加。さ。さ。敵。敵。所。所



のねとある。御説を穿る。今あの伝不息絶て身の死を死ね開て後お穿人親兵衛が面伏  
 るを思ふ。花の昔の老樹の悲し町人の後家町人の母より身の大刀抜く術を知  
 るがそれ信の時役の立立生甲斐もる。既覚期と究めぬ切切の恥と知る者  
 をと信親兵衛お傳へる。然るにたる身と起して外面投て出まきまき。小文吾慌て  
 掖居て理を辨へる。有敷お老女今や短慮の似け。と叱るが。信乃も始困  
 果て。妙真を寛解して。姨脚。然るに思ひぬ。俱お稲村へおて。又大阪等と商  
 量せ。御身の隨意做す。もあえ。必る性起りぬ。喃大田。姨の心一筋も。忠信  
 節義の故。理する。このいかに。和殿の主張甚麼を。向へ小文吾。然るに。の  
 中。果も。俱お稲村へおて。久然。と。姥雪の穉子。争何せん。と。いふ。ち  
 かとね。音音と曳。單節も。俱お救て。我們二人御用お立て。姨の憾と送される。快々  
 せ。ゆえ。そ。又本意。あ。まん。ガ二尺八。苗守。炊妻。任用。せ。左。右

もあ。却。非如。位。も。甚。も。飢。死。を。幸。と。喘。信。乃。頭。を。掉。  
 否。と。母。大。母。さ。宿。所。在。で。穉。子。の。留。守。置。人。怪。む。信。乃。兩。個。の。穉  
 子。も。親。達。俱。し。稲。村。へ。お。ね。那。里。お。造。り。と。穉。子。と。一。議。を。果。音。音  
 曳。單。節。お。救。ひ。ぬ。之。歎。を。轉。て。ち。笑。れ。妙。真。の。貌。を。改。め。信。乃。小。文  
 五。口。謝。て。お。穿。思。ひ。多。く。刀。輪。們。の。心。詞。を。盡。さ。す。小。夜。の。深。る。も。知。り。一。只  
 一。筋。も。老。女。の。愚。痴。を。人。も。恨。も。身。を。托。し。他。の。讓。り。と。思。ひ。忠。義。の。誠。心。を  
 け。と。猜。し。術。と。相。計。い。る。好。意。お。て。面。と。起。を。救。ひ。奴。家。の。る。を。親。兵。衛  
 が。異。目。か。り。来。る。の。美。を。穿。る。本。意。と。稱。ん。信。乃。一。腹。立。詞。の。効。を。  
 痛。痛。く。思。ひ。ん。許。し。ぬ。と。ち。勸。解。れ。信。乃。笑。々。點。頭。を。救。ひ。咱。も。同。前  
 勸。解。ら。中。を。え。却。咱。の。犬。田。と。俱。明。日。早。夫。稲。村。へ。お。穿。姨。の。姥。雪。の  
 母。子。五。名。と。各。轎。子。を。駕。り。背。も。續。け。稲。村。へ。詣。来。る。轎。子。を。用。い。外。親。と。數



所以を以て。其の我々の伴當を分りて。兩三名残り置きて。他者を俱して。其の  
 との。小文五音も。俱におもひ。脚小の出。初め。年少。おの。老。身。粧。時。の。程。る。者。稲  
 村。の。程。近。く。目。景。短。く。時。候。れ。今。宵。も。准。備。を。い。た。め。と。期。を。推。其。妙。真。音  
 音。曳。の。單。節。者。と。皆。共。侶。の。心。を。多。又。茶。を。煮。て。を。薦。め。け。る。中。力。二。尺。八。を  
 暮。春。と。躬。を。臥。房。へ。入。り。早。く。熟。睡。を。ま。り。て。這。客。を。知。ら。ざ。り。け。り。既。而。て  
 信。乃。小。文。五。音。妙。真。音。五。音。皆。の。辭。一。別。れ。て。頃。日。姑。且。疎。多。け。當。城。宿。所。へ。來。て  
 共。侶。の。夜。を。明。さ。し。留。守。者。を。諫。僕。れ。皆。飲。ひ。て。仕。け。り。慈。而。次。の。日。信。乃。小。文  
 五。音。早。天。の。稻。村。へ。赴。く。程。の。妙。真。及。音。音。曳。の。單。節。力。二。尺。八。を。推。乃。那。伴。當。の  
 央。へ。四。箇。の。轎。子。を。駕。り。俱。お。稻。村。へ。の。ぞ。け。り。抑。這。一。對。四。箇。の。義。姑。節。婦  
 が。情。地。の。軍。役。を。用。い。られ。後。の。話。説。甚。麼。を。并。下。回。解。分。る。を。聽。ね。が。り。  
 南總里見八犬傳卷之五十二終

十五編 五火くし月二十三日 晴音院

清香 梅の雪  
 奇藥 一包七十二孔  
 花橘 相の描入 六十四銅  
 古今手影の山化粧水 丁子屋平花橘  
 美藤にちるく 信令の妙薬  
 第一酒の毒清小  
 江戸大傳馬町 二丁目中程 丁子屋平花橘



